

## 中世の信仰と板碑

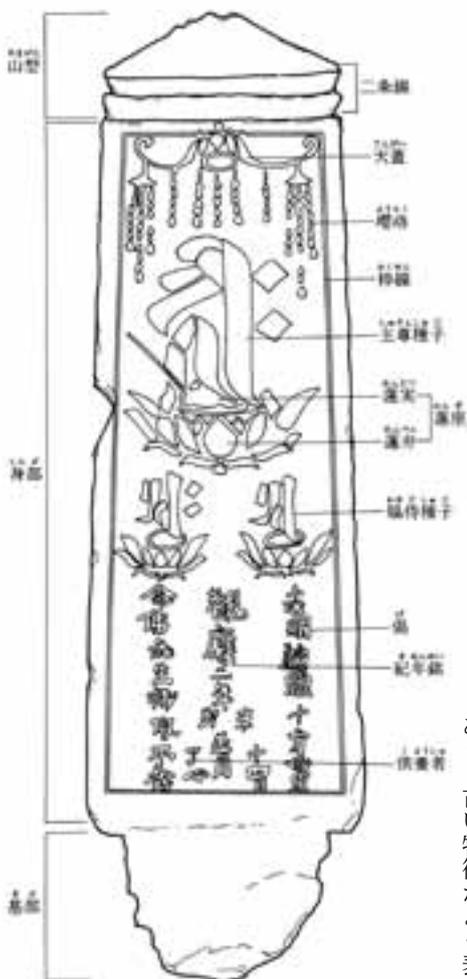
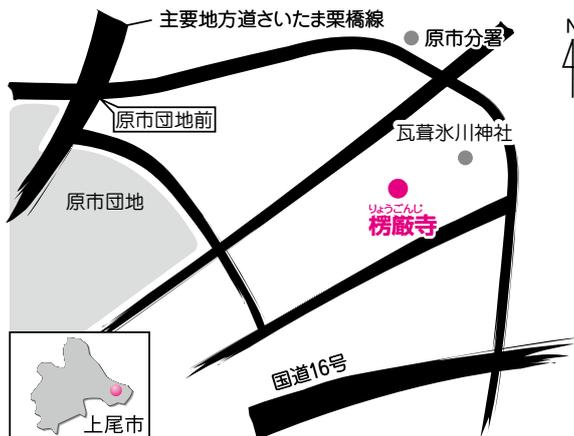


図1 武蔵型板碑の模式図  
三角頭や二条線が特徴的



上尾市内には、鎌倉・室町時代を中心に造られた供養塔の一種である板碑が、約75基確認されている。これらの板碑は、秩父地域の荒川流域や比企郡小川町下里で産出する緑泥石片岩を使用し、関東一円に造立された武蔵型板碑である(図1)。武蔵型板碑は、その形状から板石塔婆や青石塔婆とも呼ばれている。埼玉県内で約17,000基の板碑が確認されている中で、上尾市における数量は比較的多く、現在でも寺社境内や路傍で見ることが出来る。市域が荒川や旧入間川流域にあることから、水運を利用して原材料を容易に入手できたためと考えられる。

市内最古の板碑は、楞嚴寺にある弘長元(1261)年銘のものである(写真1)。この板碑は高さ105センチ、幅35・8センチで、蓮座上に当時厚く信仰された阿彌陀如来を表す「キリク」の梵字を刻む。背が高く幅広で厚みがあり、古い特徴がよく表されて

いる。その後は、向山地蔵堂の文永四(1267)年銘や楞嚴寺の文永九(1272)年銘板碑と続き、徐々に数が増加する。なお、市内では阿彌陀如来を主尊とする板碑が24基と最多であり、釈迦如来や薬師如来などを主尊とする板碑は少数である。

板碑の主尊として阿彌陀如来が多い理由は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、阿彌陀仏のいる西方極楽浄土に往生し成仏するという浄土教の教えが、政権の担い手となった武士を中心に社会に浸透したことが挙げられる。また、浄土教の流れをくむ浄土宗や時宗などの鎌倉新仏教が、広く庶民に受け入れられたことなどにもよる。これらの信仰を背景に、死者の供養や、自身の生前供養(逆修)を主な目的として宝篋印塔や五輪塔、板碑などさまざまな石塔が造立された。その中で板碑は、一枚の岩によって比較的簡単に造ることが出来るため、数多く造られることとなった。

時代が下ると板碑は小型化し、仏典の詩句を刻むものや、庚申待や月待など民間信仰の影響で造立されるものも現れた。姿形は似ている板碑だが、それぞれ調べてみると、信仰の移り変わりを読み解くことができる。

(上尾市生涯学習課)



写真1 弘長板碑

## コラム column

### さまざまな年号の板碑

板碑が多く造立された南北朝時代、市域一帯を含む地域は足利勢の北朝勢力が強く、この時期の板碑はほぼ全てに北朝年号が用いられている。しかし、南朝年号である正平7(1352)年銘の板碑も残されている(写真2)。

正平7年は、北朝年号の観応3年に対応し、この時期は幕府内の対立(観応の擾乱)で足利尊氏が一時的に南朝に降りた観応2年11月から翌3年3月の期間である。

尊氏はその後、弟の直義を討伐すると正平を観応に戻した。南朝年号が使われた期間は

短く、この板碑は当時の社会情勢を反映している貴重な資料といえる。

また「延徳」や「福德」といった、朝廷が正式に定めたものでない年号を用いた板碑もある(写真3)。これらの年号は私年号と呼ばれ、社寺や有力者が時の年号をめたい字に置き換えたもので、元号の攘災や招福のためと考えられている。

板碑には、信仰だけでなく、社会の動向も反映されている。



写真2 正平七年銘板石塔婆 (市教育委員会寄託)



写真3 私年号板石塔婆 (個人蔵) 私年号の「福德」が刻まれている